

## [分かち合う世界へ] 27、タイ産日本米の虚と実

アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸



二期作が行われているタイ・チェンライ県で見た日本米の田植え風景 = 2019年12月

昨年12月中旬、マスコミの取材に協力・同行して、タイ北部チェンライ県などの日本米生産地域を視察した。

以前から「ササニシキやあきたこまちはタイの在来種と交配されて品種改良されている」とか「ある会社がタイでコシヒカリの生産に成功した」とかいったうわさは、よく耳にしていた。

タイ政府農業組合省米局、日本米の育種試験研究や種子生産の中心であるチェンライ県稲作試験場、そして信頼のおけるタイの大学や民間の専門家・研究者たちの話を聞いて分かったのは、63年前の1957年に国連食糧農業機関（FAO）の支援事業により、27種の日本米の種がタイに試験的に紹介されたことだ（昔のこととはいえ自分が勤めていたFAOが直接絡んでいたことに驚いた）。

そのうちタイの気候風土に適応性が高いと思われた10種が試験栽培され、改良を重ねた結果、ササニシキとあきたこまちの2種類だけがうまく適応し、95年に正式にタイで品種登録された。タイで呼ばれている品種名はそれぞれ「DOA（農業局）1」（ササニシキ）と「DOA2」（あきたこまち）だ。

この二つの品種はタイの在来種と交配されたものではない。あくまでも元の品種が改良されたものだが、DNAを調べると二つとも、本来のササニシキやあきたこまちにある遺伝子的な特性の多くが失われているという。「推測だが、山岳民族が栽培する日本米に似た陸稲と自然交雑したのではないか」とカセサート大学の専門家は指摘した。

チェンライ県稲作試験場の場長によると、コシヒカリは試験栽培された10種類の中に選ばれたが、その人気に反して栽培が難しく、いまだに改良試験の途中で、商業ベースでの生産や正式な品種登録の見通しは立っていない。現在は主として他の品種との交配材料として、試験研究に使われているという。

つまりコシヒカリはタイでは品種登録や栽培許可が下りておらず、タイ産コシヒカリが生産販売されているとしたら、日本から不正に種がタイに持ち込まれた可能性がある。タイ政府の日本米に対する監視や規制が緩く曖昧なことが、原因の一つと考えられる。

世界的な日本食ブーム。政府統計では世界の日本食レストラン数は12年前に比べて6倍に急増した。日本米の需要はさらに増大するだろう。タイ産日本米の値段は日本産の米に比べて半額か3分の1程度だ。しかし、味や品質ではとうてい日本産に追いつけない。海外での日本食ブームがさらに高まり、値段は高くてもいいからと消費者が本物の味を求める時が必ず来る。その時のために、海外市場をしっかりと見据えた日本の稲作であってほしい。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士（農学）。元国連食糧農業機関（FAO）事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人（非営利）アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。

2020/01/12 15:53